

歴史から学ぶ「福山」

郷土の

きょうどのいじん

— 第52回 —

偉人たち

皆さんが暮らす福山市には、
かつて偉業を成し遂げた多くの先人がいます。
今では忘れられた、郷土にゆかりのある
偉人たちを中心に紹介します。



市右衛門の墓



執筆
エフエムふくやま
専務取締役 局長
田中 宏行
(福山市立御幸小学校・
幸千中学校出身)

れきし ぶたい こつぜん なぞ つつ ひめたにやき
わずか20年で歴史の舞台から忽然と消えた、謎に包まれた「姫谷焼」

市右衛門は、江戸時代前期、備後国安那郡広瀬村(現・広島県福山市加茂町百谷)で幻の焼物「姫谷焼」を生み出したと伝えられる陶工です。しかし、その生涯は謎に包まれ、詳しいことはほとんど分かっていません。

姫谷焼は、肥前窯(現・佐賀県有田)の高度な磁器製造技術を取り入れた焼物です。1660年代から1685年頃までの約20年間生産されたその後廃窯したことから「幻の焼物」と呼ばれています。17世紀の日本で本格的に焼かれた色絵磁器は、肥前の伊万里焼と、その一様式とされる古九谷様式、そして備後の姫谷焼だけでした。窯跡は福山市加茂町百谷地区北部の国道182号線沿いの山中にあり、発掘調査で斜面を利用した登窯2基が確認されました。出土した白磁染付・鉄絵などの磁器や陶器、窯道具などは福山市重要文化財に、窯跡は広島県史跡に指定されています。姫谷焼の最大の特徴は、伊万里焼の技術を基礎としながら、京焼の優雅な美意識を取り入れた独自の作風にあります。当時の色絵磁器は中国風の意匠が多く、余白を生かした和風の美しさ、際立つ姫谷焼は、洗練された色絵として高く評価されています。日用品はほとんど作られず、茶碗などの茶道具や染付皿などの高級食器が中心で、現存

まぼろし やきもの ひめたに やき

幻の焼物「姫谷焼」(17世紀の初期色絵磁器の一つ)を生んだ陶工

とうこう

市右衛門

いちえもん(?-1670)

する作品は個人蔵が多く、200点弱に過ぎません。市右衛門の素性には、いくつかの説が伝えられています。へ主なものは、左記の通り

①キリシタン陶工逃走説／京の陶工・高原五郎七は加藤清正が朝鮮から連れ帰った陶工で、初代柿右衛門の師とも伝えられています。五郎七がキリシタン弾圧を逃れて肥後へ移った際、その高弟とも伝えられる市右衛門は、加藤清正の正室が福山藩主・水野勝成の妹という縁を頼って福山へ移住し、姫谷で色絵磁器を焼いたとする説です。姫谷焼と伊万里・柿右衛門系の技術的なつながりを示す伝承として知られています。

②駆け落ち伝説／京の陶工と公卿の姫が駆け落ちして姫谷に窯を開いたという伝説です。鮮やかな赤絵は人の血で描かれたという逸話が残されています。

③水野勝成関与説／江戸時代後期編纂の郷土史『西備名区』には、福山藩主・水野勝成が放浪時代に姫谷の陶工のもとで作陶し、藩主となった後にその陶工に経済的援助をしたという記述があります。しかし、勝成の放浪期と姫谷焼の成立年代が一致せず、今では誤伝と考えられています。

市右衛門の実在を示す物証として、窯跡近くに墓石が残されています。また、正福寺(福山市加茂町下加茂)の過去帳には、姫谷の焼物師・市右衛門の法名とされる記載があります。しかし、後の調査で江戸時代後期に記入されたものと判明し、その信頼性について再検討が行われました。

水野家改易後、この地域は豊後中津藩の飛地領となり、関係資料もほとんど残されていません。そのため、市右衛門の足跡や姫谷焼が短期間で忽然と姿を消した理由は、今なお謎のままです。それでも、市右衛門が残した作品は、希少な初期色絵磁器の名品として珍重されています。



姫谷焼の色絵牡丹文皿(写真提供:平地茂雄氏)